
一週間前

宮城時雨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一週間前

【Nコード】

N9193C

【作者名】

宮城時雨

【あらすじ】

一週間前から私は彼女を避け続けている。彼女が嫌いになったわけではない。ただ、カノジョが恐ろしいのだ。

一週間前から私は彼女を避け続けている。

別に彼女のことを嫌いになっただけではない。

ただ、怖いのだ。

カノジョのことが。

「ちょっと」

彼女が背後から私の肩に触れる。

私の体は強ばった。

「な、なに？」

彼女に顔を見もしないで返事をした。

見られない。彼女を。

「何よー。一緒に帰ろうよ。アンタ最近私のこと避けてるみたいだから、声かけたの」

私は無理に笑って見せた。

「避けてなんて…ごめんね。誤解させたみたい」

「あ、よかった。私

アンタになんかしたのかと思った。びっくりさせないでよ」

彼女は安心したように笑った。

同時にカノジヨも笑う。

「最近良いことがあってねー。彼氏のことなんだけど」

彼女の嬉しそうな笑顔。幸せそう。

「彼氏って、出会い系の…？」

訊ねると彼女は大きく頷いた。そういえば最近不倫してるって楽しそうに話してたっけ。

「そ。彼、奥さんと別れてくれた」

私は返事をできなかった。一体なんていったらいいのか…

「奥さんには悪いけどさ。まあ彼はあたしを選んでくれたわけだし」

どこかいい訳じみた口調で彼女は訥々と語りだす。

私はカノジヨを盗み見る。嬉しそうに笑っていた。

「ねえ。それっていつの話？」

「ん？ 何が？」

「彼氏さんと奥さんが別れたの」

彼女は、ああとつぶやいて、悪戯っぽく微笑んだ。

「一週間前よ」

カノジヨは頷いた。

「……………へえ。それで奥さんどうしたんだろうね……………」

「なんかねー、慰謝料とか全然請求してこなかったってさ。あっさり、ハンコ押してくれたみたい」

彼のこと愛してなかったのよ、彼女は勝ち誇ったように言った。

いや、奥さんは夫である“彼”を愛していたに違いない。

だって。

「分かれた後、奥さんどうしてるんだろう」

「えー？ 実家に帰ったんじゃない？ 連絡つかないって彼言ってたし」

連絡がつかない。

それはそうだろう。

「今日、彼と会っんでしょ？」

彼女は頬を赤らめた。

「わかる？」

「うん。だってすごく嬉しそうな顔してるもの」

彼女も。カノジヨも。

「これからは何の障害もなく彼と付き合えるわ」

彼女は自分に言い聞かせるようにつぶやき、カノジヨはいつそう笑みを深くした。

カノジヨの笑みは不気味だったけれど不思議と今は恐ろしいと感じない。

感じるのはカノジヨと彼女への哀れみ。

「あ、私、彼とあの喫茶店で待ち合わせなの」

「そっか。じゃあデート楽しんできてね」

彼女の表情は本当に幸せそうで。カノジヨもその背後で微笑んだ。

「また明日」

そう言って彼女はカノジヨを背負って店の中に消えていった。

「お幸せに」

カノジヨの正体が分かってよかった。

それにしても彼女は一生カノジヨを背負ったままなのかしら。

「まあ、いいか」

そんなことよりもあと五分で電車がくる。

私は駅に向かって走り出した。

（後書き）

べたべたホラーです。読んでくださった方々に感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193c/>

一週間前

2010年10月11日02時40分発行